

海底地殻変動観測から求めた南海トラフ沿いの水平変動ベクトル

Horizontal deformation vectors along the Nankai Trough derived from sea-bottom crustal deformation measurements

田所 敬一 [1]; 渡部 豪 [2]; 武藤 大介 [3]; 杉本 慎吾 [3]; 奥田 隆 [4]; 木元 章典 [3]; 生田 領野 [5]; 佐柳 敬造 [6]; 久野 正博 [7]

Keiichi Tadokoro[1]; Tsuyoshi Watanabe[2]; Daisuke Muto[3]; Shingo Sugimoto[3]; Takashi OKUDA[4]; Akinori Kimoto[3]; Ryoya Ikuta[5]; Keizo Sayanagi[6]; Masahiro Kuno[7]

[1] 名大・地震火山セ; [2] 名大・地震火山センター; [3] 名大院・環境; [4] 名大・地震火山センター; [5] 東大・地震研/学振研究員; [6] 東海大・海洋研; [7] 三重科技セ・水産

[1] RCSVDM, Nagoya Univ.; [2] RCSVDM, Nagoya Univ.; [3] Grad. Sch. Env. Studies, Nagoya Univ.; [4] RCSVDM Center, Nagoya Univ.; [5] ERI, Univ. Tokyo / JSPS; [6] IORD, Tokai Univ; [7] Fisheries Div., Mie Pref. Sci. and Tech. Center

我々のグループでは、船の位置をキネマティック GPS 測位で決定し、船（船上局） - 海底局間の距離を超音波測距で測定して海底局位置を決定する海底地殻変動観測システムを開発している。2004 年からは、熊野灘 2 カ所（KMN, KMS 観測点）と駿河湾 2 カ所（SNW, SNE 観測点）において長期くり返し観測を実施している。

これまでに、KMN 観測点では 10 回、KMS 観測点では 15 回、SNW 観測点では 5 回、そして SNE 観測点では 11 回の繰り返し観測を行ってきた。水平各成分の繰り返し観測精度は、各観測点とも（場所によらず）2~3 cm である。これらの解析結果からトレンドを求めることにより、アムール固定の変位速度ベクトルを求めた。その大きさは、KMN 観測点で (-68+/-20, 15+/-35) mm/yr, KMS 観測点で (-58+/-32, 19+/-34) mm/yr, SNE 観測点で (-53+/-31, 1+/-22) mm/yr である。これらのベクトルは、誤差楕円まで考慮に入れると、GEONET の観測による結果と調和的である。今後は、遠州灘沖にも観測点を設置し、南海トラフ沿い（東海・東南海地震の震源域内）における広域観測観測を推進する計画である。